

## 彙報

## 京都哲學會公開講演會記事

昭和三十五年度の京都哲學會公開講演會は、十一月十二日(土)午後一時半から、京都大學文學部第一教室において、重澤俊郎教授の司會により左記の通り行われた。

一、原始藝術における抽象の問題……京都大學 教授 蓮實重康氏

——士 偶——

一、使徒パウロの神秘主義について……京都大學 助教 武藤一雄氏

終了後、樂友會館において、委員、賛助員、一般會員出席のもとに懇親會を開き、蓮實、武藤兩氏を圍んで、九時頃まで歡談した。なお、兩氏の講演内容は追つて本誌に収録する豫定である。

## クイレス博士を圍む懇談會記事

サルヴァドル大學哲學教授クイレス博士 (Dr. Prof. Ismael Outles) を圍む懇談會が、京都大學文學部主催によつて十月二十日(木)午後三時より文學部會議室で行なわれ、席上、同博士によつて「Existentialism, In-sistentiaism and Nothingness」と題し左記要旨の報告がなされた。

## 要旨

この講演において私はおよそ哲學の主要問題である「人間」

と「有」の問題について、第一に傳統的な解答である實存主義を吟味してそれがこの問題の完全なまた最終的解決たるにまだ不充足であることを説明し、次に私自身の存在解釋である内存主義 (In-sistentiaism) の概要を申し述べて問題解決への方向を指し示し、最後にこの内存主義の立場が無の問題の解決に援用されてもきわめて有効であり、同時に無の積極的な意味もこれによつて明瞭なることを確かめてみようと思ふ。

## 一 實存主義 (Existentialism)

實存主義とは一般に、「人間とは何であるか」という問いに對して、人間という存在のもつ特有の在り方を特に「實存」(existence) という概念で説明する立場をいう。ところでこの「實存」とはサルトルによれば「本質に先立つ」もの、すなわち何らの理由も法則もたず、いかなる説明をも容れぬものである。つまり彼によれば實存とは或る無意味であり従つて人間とは或る無意味なる存在ということになるが、事實は人間は常に或る仕方であらうかぎり有意義な存在なのである。ヤスパールは實存を「超越性」に求める。ところで、超越とは私自身のうちに有らぬこと、つまり他人のうちに有ることを意味する。しかるに事實は、人間が實存するということは人間が有に在ることでなければならぬ。ハイデガーにおいては實存とは或る外面性を意味するが、人間が自己自身の外に在るということは結局人間の究極の本質ではありえないのである。では、こうして遂には「存在論的神秘」(マルセル)とまで呼ばれた實存の問題をめぐつて、哲學は人間の實在的構造を見失ひ、形

而上學はその基礎を失つたのであろうか。

## 二 内存主義 (In-scientialism)

私が「内存主義」と名づける存在論の立場はことさらに新しい説ではなく、西洋哲學の傳統において多くの哲學者たちが既に何らかのかたちで説き示した事柄に明確な定式を與えたものに過ぎない。例えばアリストテレスは「第一實在」すなわち「アルケー」を定義して「あらゆる實在がそれから由來し、あらゆる實在がそれになるところのもの」と言つた。プラトンは『第二アルキビアデス』で、あらゆるものは有るがそれは自分、う、ち、に (inside) 有ると言つてゐる。その他、プロティノス、聖アウグスティヌス、聖トマス・アクイナス、デカルト、カント、マックス・シェラー、オルテガ・イ・ガセット、ハイデガーなどみな同様の考えを抱いていたことがテキストの検討により納得されるのである。いつたい人間が特に人間として動物と異なる點は、動物は單に存在するだけであるが人間は内面性を持ち、いかなる事態においてもそれをまつたく失うことはありえないという點にある。ここでいう「内面性」とは單なる意識ではなく、むしろ「人間が自己の活動より直接に知るところ」(what we know direct from our activity) のものを意味する。例えば、自由、宗教、道徳、人格性、超越、存在などの場合がそれである。「内存」に二つの契機が區別される。すなわち、知識としての内存 (反省的經驗) と有としての内存 (存在的構造) である。いずれも人間の「第一の知識」(first knowledge) および「第一の有」(first being) をなすのである。

## 三 無 (nothingness)

「人間」と「有」の問題は「無」の問題と不可分離の關係にあるが、この「無」に關してもさまざまな説が出されている。サルトルは「無」を「有」に對立するものとして非實在に歸したが、同時にこの存在の無をば意識と自由の成り立つ根源と見なした。ハイデガーにとつて「無」とは個的な「存在者」の場所であり、有の明るみに立つ明 (Being-sense) とは實はきわめて光り輝ける夜のごときものである。一方、佛教では個的自我の否定と絶對的自我の肯定の極致として「無」がたてられており、西田哲學は三つの世界——(一) 自然的世界、(二) 意識の世界、(三) 睿智の世界を區別するが、それに止まらずこの睿智の世界を超えて絶對無へ到る完全な超越が説かれている。さて、「無」の問題は内存主義によつて次のように説明される。まず、「有」を三つに區別しよう。すなわち、(一) 具體的な有、(二) 具體的普遍的な有、(三) 普遍的絶對的な有である。(一) は個々の現實的存在 (ないし存在者) を意味し、(二) はいわゆる概念あるいは觀念としての抽象的存在 (ないし存在者) を、(三) は絶對無限定な、従つて私これを理解 comprehend——すなわち精神のうちにとり入れ包み込むことのできない存在、むしろあらゆる存在がそれに由來しそれに基づくような有である。「有」のこの三つの階序に對應して三つの「無」が區別される。すなわち、(一) 「具體的有」の無、(二) 「抽象的有」の無、(三) 「絶對的有」の無である。第一の「無」は相對的な無であり、第二は意識の無、そして第三は絶對無す

なわち絶對的無限定としての無である。それ故「絶對無」は「超一存在」・「超一本質」・「超一自我」であり、一言にして言ふなら絶對的無制約者である。こうして、單なる否定的意味に止まらぬ「無」の積極的意味が顯わらなる。

すなわち、「無はすべてを包む」(Nothingness comprehends all.) のである。(三嶋唯義記)

次 號 論 文 豫 告
神の現存と認識……………山 田 晶 ——アウグスチヌスとトマスにおける——
John Locke における認 識 (完)……………服 部 知 文 ——その体系の統一的把握について——
ヌース素描……………長 坂 公 一 ——晩年のプラトンが愛用した用語の研究——

### 會 告

最近の諸物價(紙代、印刷代、郵便料など)の昂騰のため、本號より會費一ヶ年分一五〇〇円(市販定價一册一五〇円)に値上げいたしますから何卒御諒承下さい。

京 都 哲 學 會